

青年医師の遺志 基金に

「AMDA」仲間たち創設

昨秋、青年医師が大阪で息を引き去った。ネパールなど世界各地の発展途上国で小児科医療に奔走した篠原明さん。三十一歳だった。その遺志を未来に引き継ぐべく、NGO（非政府組織）の多国籍医師連絡協議会「AMDA」（菅波茂代表、本部・岡山市）は十六日、途上国でのボランティア活動を志す医療関係者の育成基金「篠原基金」（仮称）の設置を決めた。篠原さんは昨年十一月二十一日に入院先の関西医科大学で、悪性リンパ腫（しんじょう）で死去した。

医師だった父親（故人）の影響で「満足な医療を受けられない途上国の子どもたちのために働きたい」と関西医科大に進学。卒業後の平成四年にAMDAの会員となり、ネパールの小都市、ダマックで医療活動プロジェクトなどに奔走した。小児病院は建築家、安藤忠雄さん（あんどうむねひさ）が無償で設計。今春着工の見通しだ。

基金設立は、母親の浪枝さん（なみぎ）がAMDAに香典など三百万円を寄贈したのがきっかけ。AMDAの田代邦子・広報局長は、途上国に目を向ける日本人医師が少ないことを嘆いていた篠原さん（しのはら）に「話したい。しっかりした基金にしたい」と話している。

問い合わせは「AMDA」
☎066・284・773
0へ。基金への協力は郵便振替
番号02501240709
（AMDA）篠原基金

途上国の医療ボランティア

「私は夢見ている。いつかこのダマックの丘に世界各国から医療従事者が集まり、経験を分かち合い、互いの理解を深め共に発展していく。そんな日が来る」とを。篠原さんは生前、こう話していた。実現に近づいたネパールの小児病院建設や婚約者との挙式も果たせないままの急逝だったが、篠原さんは多くの人々の心にも今も生きている。
（社会部 吉村剛史）

病院着工見ず急逝

君の夢 忘れない

初めて篠原さんにお会いしたのは平成五年、ネパール・カトマンズ。宝塚市民が救急車を現地医療法人に贈る式典を取材したときだった。素直にゴムぞうり（ごもぞうり）という話す篠原さんに、同じ日本人として、誇らしい心で話を聞いた。治療費が払えないばかりに重病の小児を連れ帰る現地人の親たちを前にしたときも「金（かね）の切れ目が縁の切れ目」と語られた。病室に覆われたのは六年秋、熱帯医学を学ぶ途中を病院を訪れた。

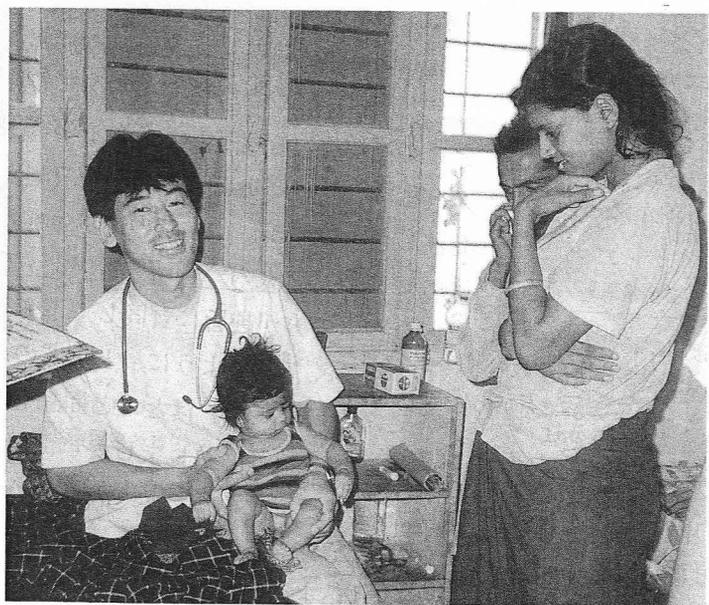
気がした。

子どものころから「神父さんのように」と言われるほどのは世話好き。医学生時代、重病に苦しむ少年のため病院に毎日のように通って勉強を教え、高校進学の夢をかなえさせたことも。AMDAに入会した翌年の平成五年にネパール・ダマックに派遣され、ブータン難民の診療にあたった。その経験が、篠原さんを「元気なうちは途上国で働く」と決心させた。

当時の現地の診療日記には、異文化の中で苦闘した心情が記されている。「今日一人、昨日一人、亡くなった」。無知、貧困のため治療を受け入れてもらえない、シレンマを感じた。

「新しい位はいを胸に、こう話した。」

ネパールのダマックでAMDAの活動をしていたその篠原明さん。篠原基金の設立で思いが受け継がれる（平成5年撮影）



ネパールの医療 多産が 亡率は一〇％、五歳未満で一般で総人口比の四割以上は二・一八％に達する（日本は二・二〇倍）。小児病院は子どもの五割が栄養不良で、カトマンズにしかない。患者四百人にベッド一床というのが現状だ。